転生したらオーガだった件

腐った林檎

【注意事項】
　このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
　小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
　オーガの里に転生したＴＳっ娘が、いずれ来るであろう大罪の魔女に対抗するために奮闘する話。
　なお、リゼロ世界だと勘違いしている模様。

目次

オーガに転生。 1
剣鬼 5
鍛錬 8
若 12
研究 18
赤と白 22
依頼 29
父さん 34
夢 44
二人の少年 48
少年と少女 54

オーガに転生。

○月○日

今日から日記をつけることにする。理由は暇すぎるから。別に友達がいないから時間を持て余しているとかそういうんじゃない。以上。

○月×日

この里には紙がないので俺だけが知っている秘密の場所の大樹に文字を刻んでいる。どうやらここは異世界のようでその証拠に現代では見ることの出来ない白い二本の角が両親の額に生えていた。
父曰く大鬼族（オーガ）という種族らしい。俺は涎を垂らして人を襲う野蛮なイメージを持っていたが、案外そうではなかった。傭兵紛いのことをして金を稼いでいるらしい。オーガは人間にも受け入れられているのだろうか、というかこの世界に人間はいるのだろうか。

○月◇日

オーガというのならもしかしたらこの世界はリゼロなのかもしれない。
だってほら、異世界で鬼って聞くとリゼロのラムとレムしか頭に思い浮かばない。他にもいたような気はするのだが俺の記憶にはないようだ。
一応里の中をくまなく探してみたがそれらしき姿は見当たらなかった。ここはリゼロの世界じゃないのだろうか。もしかしたらラムとレムはまだ生まれてきていないのかもしれない。

○月△日

原作をよく知らないので、作中に出てきたオーガの里を襲った奴が

どんな者なのかとかは分からないが一応生き残れるように剣……刀の練習を始めた。
　いわゆる日本刀で転生者である俺からすれば憧れの武器である。刀を教えてくれるのは白髪の爺さんだった、名前はないようで俺はいつも師匠と呼ばせてもらっている。
　師範の方が良かったのかもしれない。まあ、俺も名前はないのだが。

□月○日

やばい、刀の鍛錬が厳しすぎて日記の存在忘れてた。とりあえず明日からはキチンと書くことにしよう。眠すぎて瞼が重い。

□月△日

キツイ、師匠の鍛錬がキツイ。まずは木刀素振り１００回と言われ正直物足りなかったがこれは渋々やり切った。
だが、そこからが地獄だった。師匠にどうだゴラァ?と煽ってみた途端、じゃあ次は２００回、３００回、４００回、５００回……と果てしなく続くエンドレス。一緒に鍛錬していた赤髪の男の子――皆から若と呼ばれているので俺もそう呼ぶことにした――は７００回でくたばっていた。
　俺は７５０回でくたばったので勝ちといえば勝ちだろう。そもそも競い合ってなどいないが。
　短いけど疲れすぎて限界なので今日はここで終わりにすることにすｒ

□月□日

朝起きたときそこは森の中だった。どうやら俺はあのまま寝落ちしてしまったらしい。急いで里に戻ると両親が顔を真っ青にして俺のことを呼んでいた。その後俺がジャパニーズ土下座をしたのは言うまでもないだろう。それでも両親は「お前が無事で良かった」と許してくれた。俺は良い親を持ったな。
その日は師匠による鍛錬もなかったので久しぶりに家族と一緒に過ごせた気がする。こういう一日も良いのかもしれない。

□月×日

今日も師匠から課せられた鍛錬は素振りだけだった。
流石に俺も物足りなさを感じていたが師匠の命令は絶対なので律儀に守ることにする(この前ほったらかしにしたら夜ベッドに師匠の刀がブッ刺さってた、怖すぎて眠れなかった)。
修行仲間である若は飽きてしまったようで他の子達と遊んでいた。アイツ俺が真面目に鍛錬してる最中にちょっかいかけてくるなよ。何が「一緒に遊ぼうぜ!」だ。こちとら生き残るために頑張ってんだぞこら、と言いたかったが仮にも若は族長の息子なため——最近知った——そんなことはできなかった。
まあ師匠が回し蹴りを食らわしていたのでスッキリしたがな。

□月◇日

いつもと違う訓練をするぞと師匠に言われ、ワクワクしながら待っていたが修行内容は結局里の周りを走り込むことだった。騙しやがったなあのクソジジイめ……、俺が大きくなったら絶対ボコボコにしてやる。

□月+日

今日も今日とて走り込み。アニメでよく見る超前傾姿勢での高速

走りにも挑戦してみたが顔から地面に突っ込み鼻を強打するに終わった。若には変な顔と笑われた。その後若の家に大量の人参をプレゼントしたのは言うまでもないだろう。

□月―日

ただ走るのもつまらないので木刀を振り回しながら走ることにした。一石二鳥というやつだね、俺ってば天才かも。……最近周りの大人から可哀そうなものを見るかのような目を向けられるのは気のせいだろう。

□月▽日

今日は会議があるからなんやらで師匠との稽古はなしになった。そこで俺は久々の休日なのでおもいっきり羽を伸ばそうとしたが、この世界にはゲームや漫画なんてものはあるわけもなく、とてつもなく暇な一日を過ごしていた。

若が広場で青髪の男の子や紫髪の女の子とチャンバラごっこをしているのを囲い窓から見ていたけど、そこに入る勇気は俺にはなかった。ま、まあ俺は孤独を愛する一匹狼だし? 別に寂しいとかそういうんじゃない、のだ。

□月Φ日

明日からは対人訓練だと師匠に言われた。へっへっへ、首を洗って待ってろよバケモノ爺ィ。そのイケたヒゲをけちょんけちょんにしてやる。

剣鬼

――末恐ろしい子だ。

眼下でひたすら木刀を振り続ける少女を見て妙齢の男は思う。

その男は三百年生きる剣鬼であり、英雄王と呼ばれることになる者に剣術を授けたこともある凄腕の剣士であったが、この少女には久しぶりに度肝を抜かれた。

剣術だけでいうならば未だ英雄王の成長速度に及ばないが、単純な魔力量と覇気に関しては彼の王に届きかけている。

十年も経っていない少女に気圧されるとは剣鬼は思っておらず、彼女の家に出向いた際、裏庭で必死に剣を振り回している彼女を見かけた衝撃は今でも覚えていた。

現に、木刀を持つ彼女の藍色の眼は何処か生き急いでいるように感じられる。今でも時折少女が幼い風貌には似合わない鬼気迫る雰囲気になるときは思わず背筋に汗が伝るのは剣鬼だけの内緒だ。

剣鬼は何が彼女をそこまでさせるのかと声をかけてみようとしたがすぐにその意は消え去った。自分は剣の師であり心の師ではないのだと、そう自分に言い聞かせたのである。……まあ孫のように可愛がっている少女の成長を見守っていたいだけなのかもしれないが。

「……確かに、これ程鍛錬に真摯に励んでおるのならあの案もいいのかもしれんの」

独り言のように呟き、瞬歩法と呼ばれる技術で一瞬にして木の枝から降り立つ。少女の背後に着地し、振り返り際に少女の背中に強烈な蹴りを叩き込むと木刀を振り終えた後で油断していたせいもあるのか、少女は思いのほか転がっていった。

そのことに冷や汗がしたが剣鬼はすぐお得意のすまし顔で明後日の方を向く。彼女の母親は剣鬼ほどの男でも尻尾を巻いて逃げるぐらい恐ろしいのだ。この前など嫁入り前の女の顔に傷つけてんじゃないよとこっぴどく叱られてしまったのが苦い思い出である。

だがそんな心配は杞憂であったようで、上手く受身がとれたのか少

し呟き込みながらも少女はすぐに立ち上がった。
「……師匠、やるならやると」
「馬鹿者、戦場でもそれを言うのか」
「う……申し訳ありません」
師匠と呼ばれた男は「修行が足りんの……」と呟きながら、流し目で少女の容姿を眺める。
短く切られた白髪、未だ幼さを残しているもののいずれ美人になるであろう中性的な顔。その大人びた言動には女性の色気を感じさせる。
もちろん既婚者であり三百年以上生きている剣鬼こそ欲情はしないが、彼女と同年代の子供（女子含む）など明らかに目がいっていた。
……そう、その子供達の中に皆から若と呼ばれる赤髪の男の子も含まれていた。それが問題なのである。
本来戦闘種族であるオーガは強者に従う習性を持つ、すなわち惚れた相手を射止めるためにはその相手よりも強くならなければならないのだ。
将来この里の長を引き継ぐ役目にある若が伴侶を持つことは喜ばしいものなのではあるが、剣鬼との剣の修行もサボっているようでは少女に勝つことなど夢のまた夢である（本人は認めていないが、見てない風を装って視界の端に映る彼女をガン見する様子はなんとも見るに堪えない光景だった）。
どうにかして若のやる気を修行に向かわせられないかと幾度も会議を重ね、問題が解決することなく終わっていたのだが、先日の会議でとある提案が出された。「あの白髪の子と若で一騎打ちをさせて、若が勝てば将来の伴侶に、負けても若はきっと再戦を望むでしょうから剣鬼の下で修行するならばと口約束を結ばせればいいのではないか」と。
その言葉に会議に集まった者達は豆鉄砲をくらったような顔をしたが、次の瞬間「それだ！」と全会一致。かくしてオーガの里の悩みは解決への道を見つけることが出来たのだ。
無論、少女が一騎打ちを受理しなければいけないのだがそのことに

ついては心配の必要はなかった。なぜなら師である剣鬼が修行と称して一騎打ちをさせればいいだけなのだから。卑怯だとは言ってはいけない。大人は無駄に知恵が回るのである。

「お主よ、今日の稽古はここまでにしないかの」

「………………？」

　疑問の目で少女は剣鬼を見る。彼女は基本的に剣鬼の指示に従順だが今まで休めという命令はされてこなかったからだ。当然、何か企んでいるのはないかと思うのも無理はないだろう。

「いやなに。明日は対人訓練をしようかと思っての、念のために今日は身体を休めることに専念した方がいいのではないか？」

「……対人訓練ですか。それなら私も願ったり叶ったりです。いい加減素振りにも飽きてきましたし、気分転換にも丁度いいですから」

　ふむ、と剣鬼は考えるように髭を触る。彼女は真面目だが遊び心がないというわけではない、興味がなくなれば剣の道から外れてしまうことだってあるだろう。

　今までは基礎を固めるために素振りや走り込みしかしていなかったが、今度からは少々風の変わった稽古をさせてみよう、と三百年生きる男は心の中でそう思ったのだった。

鍛錬

△月○日

木刀（相棒）を握りしめ、いつもの訓練場所に行くと何故か若を小脇に抱えた師匠が待っていた。

　まさかこのジジイ次期里長である若を振り回して武器に使うんじゃないんだろうかと思ったが、そんなことはなくまずはこの若を倒してからにしろと言われた。頭上に?マークが浮かんだが早くしろと催促してくるので戸惑いつつも若と戦ってみた。

　真面目に鍛錬していた俺は若の大振りな横薙ぎをしゃがんで避け、足を掛けて転ばした。近くの森林の中から「おお!」という声が複数したのは気のせいだろう。若はすぐに起き上がったが師匠に何か囁かれ渋々といった顔で里の方へ行ってしまった。何を言われたのだろうか。

　ああ、もちろん師匠にはボコボコにされました。加減というものを知らないのかあのジジイ。

△月◇月

今日から若も鍛錬に参加するらしい。よかった、このままのペースだと俺が死にかねなかったからな。若がいる分鍛錬の厳しさも下がるだろう。と思ったら全然厳しくて草。ていうか前よりも厳しくなった気がする。

△月□日

き、厳しいよぉ。若、お願いだから「もっとだ!俺ならもっと出来る!」なんて言わないで、おじちゃん調子に乗り出すから。

　身体中傷だらけで家に帰ると母と父が真っ青な顔して飛んできた。何があったんだと聞かれたので「師匠にやられました」と言ったら般

若のような顔をして家を飛び出していった。母の手に刀、父の手に弓があったのは見間違いだと願っている。師匠、ご武運を。

△月☆日

師匠が昨日よりもちょっと痩せたような気がする。とうとうこのイカれたジジイの身体にも老いが回ってきたかとほくそ笑んでいたが訓練では昨日よりも地面を転がってしまった。

今日の師匠は一味違う！と若も震えた声で叫んでいた。若は俺以上に転がっていた。地味に嬉しい。誰か若の転がるシーンでＭＡＤでも作ってくれないだろうか。

△月▽日

俺の刀は師匠曰く流に向いているらしい。流で刀と聞くと鬼滅の水の呼吸を思い出すのだが、俺が目指すのはあれでいいのだろうか。凪なんて一生できる気がしない。そもそも呼吸法知らないし、鬼滅の世界じゃないし。

てか師匠、身体痛くて動けないのに「いつまで気絶しているフリをしているつもりじゃ？」って木刀でつんつんしないで！

△月×日

とりあえず山に登って降りてを繰り返してみた。確かに空気の濃度が違うのが身に染みて分かったな、すごく肺？が痛いけど。

師匠にはちゃんと今日は休みますと伝えているので問題はない。俺は経験から学ぶ男なのだ。

△月＋日

若が師匠に怒られた。何でも真面目に鍛錬をしろ、昨日と比べ明ら

かに動きが鈍っているとのこと。昨日はそんなに調子が良かったのかな、俺は全然気づけなかったが師匠にはお見通しだったらしい。流石無駄に動きが速いジジイだぜ。

△月◎日

夜、いつものように大樹に日記を書きに行こうと家を出ると若が必死に木刀を素振りしているのを見かけた。日中とは段違いの速さで木刀を振り回して正直驚いた。あんなにスピード出るなら昼間から真剣にやればいいのに。効率が非常に悪い。そう、俺のようにしっかり休んでしっかり動くスーパーオーガが一番良いのだ。

△月—日

鍛錬場所に行くと紫髪の女の子と青髪の男の子がいて、彼らも鍛錬に参加することになったらしい。女の子が増えることはいいことだな、俺のモチベーションのためにもサボるなんてことはしないで欲しい。俺は、里を守る男になるんだ！

△月●日

若が「こんなクソ修行やめてやる！」と言って逃げ出した。正直よくここまでもったなというのが俺の感想だ。
だが師匠は「………ほう、鬼ごっこかの？」と言って逃げ出した若の隣を並走しだした。どこに逃げようとしても真横にジジイの顔がついてくるなんて悪夢以外の何物でもない。
すぐ捕まえられる位置にいるのに決して捕まえようとしない恐怖、経験者しか分からん事よな……（遠い目）。一応、紫髪の子と青髪の子には忠告しておいた。

△月★日

大量のたんこぶでイケメンになった若は放っておいて今日は自分の刀の型について考えながら鍛錬をしてみた。流の戦闘キャラといえば冨岡とシルバーファングしか思いつかない。刀の使い方でいうならば水の呼吸が適当なのだろうが、俺は出来ることなら流水岩砕拳を取り入れたい。理由は特になし。強いて言うならばカッコいいから。それだけである。

△月＊日

母から少しは女としての技術を磨きなさいと言われた。俺にはそんな技術必要ないのに……、コンビニ弁当さえあれば人間生きていけるもんだよ……?あ、そういやコンビニないし人間じゃなかったわ。とりあえず明日は鍛錬を休みなさいとのことで俺は「はい!喜んで!」と笑顔で承諾した。明日一日ジジィの顔を見なくてすむなんて最高だ!

若

酒のつまみの定番として若について話されることが多いのだが、その数ある話の中でダントツで人気なのは若の恋についてだ。
やれ俺の娘に見惚れていた、やれ僕の娘と仲がいい、なんて不確かな情報が飛び交うが誰もが「ああ、どうせこれも嘘なんだろうな」と心の中で思っていた。それでも嘘に付き合うのは里内にて話題が少ないからである。近所の老人が腰をやっただけで大騒ぎになるほど平和な里では話題がなかった。
幼い頃から分かる将来美男子になるであろう端正な顔を持つ若は同年代の女子からも好意を寄せられることは多い。だというのにも関わらず、若個人の恋事情については誰もが知ることが出来なかった。

一時期は男色なんじゃないかと噂されることもあった。だがその噂はすぐに消え去ることになる。

それは何故か?理由は単純である。

あの若が本当に女子に恋をしたのである――――!

☆　☆　☆

とある広場にて。
「おい、あの子とは上手くいったのかよ若」
「るっせぇ!俺はアイツのことなんて好きじゃねぇよ!」
「と、言いつつも?」
反論してもまったく退こうとしない白髪の男に若は思わずギリギリと歯軋りをたてる。

この男、先程から後ろについてきて追っ払おうとしても付いてくるのだ。それだけでも迷惑この上ないのに、例によってあの噂について話しかけてくる。
　自分は別にアイツに対して何とも思っていないし、それをいうなら妹の方が何百倍カワイイとさえ思っているがこのような根も草もない噂でからかわれるのは我慢が出来なかった。
　最近こそ自重というものを知った若だが元々短気な性格だ。もう我慢ならぬと勢いよく後ろを振り向いて怒鳴る。
「さっきからうるさいんだよお前っ！」
「はっはっは、そんなこと言わないでくれよ。将来のお義父さんに対して失礼だとは思わないのかい？」
「誰がお前の息子になるものか！」
「いいやなるね。僕の鍛え上げられた直感がそう決めつけている、間違えるはずがない」
「どんだけ自信持ってんだお前!?」
　自信満々に胸を叩く男に若干引き気味になる若だが、こういう奴には近づかない方がいいという白髪の少女の言葉を思い出す。そして彼女はこうも言っていた、「後ろを向いて全力で逃げるべし」と。その言葉どおり若は持ち前の瞬発力を活かし一瞬にてその場から離れる。
　決して惨めな逃亡ではない、どこまでも洗練された正に〝逃げ〟の動き。その美しさに男もほうと感嘆する。まだ幼いのにどれだけの修行を積めばあそこまで辿り着いたのだろう、今度爺さんに聞いてみよう、と心の巻物に書いた。
　そして、何か思い出したかのように手をぽんと叩く。
「若ぁー！僕の娘なら今里長の家にいるよー！行ってみたら良い事あるかもよー！」
「誰が行くか！ていうかお前の娘って誰だよ!?」
「世界一の美少女さ！」
「どんだけ自信持ってんだお前!?」
「とにかく、キミの家にいるからねー！」
「だから行くわけないだろーが！」

「……本当にいた」
木に張り付いて家の中を覗き込む者が一人。紅の炎のように真っ赤な髪は太陽に照らされて一層輝いて見えた。決して泥棒ではない。というか、若である。この男あれほど行かないと叫んでいたのに行っていることに気付いているのだろうか。剣よりも心を磨くべきである。
若の視線の先には先程話にも出た白髪の少女があった。その隣には自慢の妹と修行仲間である紫髪の女の子もいる。どうやら昼食をつくっているようで鍋に何かを入れ込んでいた。今日の昼は牛鍋か……なんて思いつつも彼女達の作業を眺めつづける。
若の妹が丁度いいサイズに切った茄子を鍋に入れる。……そういやアイツがこの前持って来てたっけか。食べきったと思っていたがまだ残っていたんだな。
次に、白髪の少女が千切りにした人参を入れた。……果たして大嫌いな人参を食べるか、それとも鍛錬をサボって怒り心頭であろう師匠の下に行くか。
後者の場合想像を絶する修行を受けることになるだろうが気絶さえしてしまえばこちらのものだ。
やはりここは心の余裕的に後者を選ぶべき……と熟考している若の視界の端で紫髪の女の子が新たな食材を鍋に入れるのが見えた。
「ふむ……そして渋柿か……ってはあ!?」
驚きのあまり木から落ちそうになるも、決死の思いでしがみつく。無理もない、まさか人参に茄子ときて渋柿なのだから。例えるならア

ンパンマンにドラえもん、クレヨンしんちゃんときてＴＯＬＯＶＥるが来るほどの衝撃だ。見間違いかと目をこすり、再度紫髪の女の子に目を見張る。

「嘘だろ……薬草まで入れやがった……！」

え？とした顔の二人を置いて勝手に食材を投入し続ける。決して見間違いではなかった、逆に見間違いであって欲しかったと若は目を瞑る。このとき、若は師匠の下に駆けだしたい一心だったが続きも気になるのでまだ観戦することにする。

果物に味噌、酒に唐辛子まで……この女は何をつくっているのだ、と若の中での紫髪の女の子への株は急落下した。俺、将来は絶対に美味しい料理がつくれる女の子を娶るんだ、とも心の巻物に書き記す。どうでもいいがこの〝心の巻物〟というのは最近里で流行っている表現である。もちろんネタ元は白髪の少女だ。

「……師匠の下に行くか」

師匠にしごかれるのも怖いが、まだソレは経験済みなので命に関わりはないと断定できる。だが、アレを食べたらどうなるか分からない。ほんの一握りの確率で美味いという希望はあるかもしれないがそれは博打である。より安全で確実な方を取るのは人として当然のことだろう。

「あ」

どうやら料理が出来上がったようで紫髪の女の子が笑顔を浮かべ鍋を食卓に運んでいるのが運悪く見えてしまった。白髪の少女の顔はいつもどおり無表情だが妹は明らかに動揺して脂汗を掻いている。どうするべきだろうか、あそこには白髪の少女だっているし妹だっているのだ。このままでは二人の身が危ない。だからといって俺がアレを食べるのも身がひける。

どうにかして誰一人として被害者がいないようにしなければ……と悩んでいると白髪の少女が箸を器用に使い大根らしき物を摘まみ上げるのが若の視界に映った。そして、彼女はそのままソレを口にへと近づけて

「ッ！」

気づいたら、身体が勝手に動いていた。
人生史上稀にみるスピードで木から降り勢いよく家の戸を引く。
「あー！腹減ったな！お、丁度出来上がってるじゃねぇか！」
いかにもさっきまで師匠と鍛錬してましたよ風を醸し出し家に入る。これから自分の身に起きるであろう悲劇にどっと汗が出ているのもこの状況ではナイスとしか言いようがない。演技こそ大根役者だが非常事態にそんなものは関係ない。ずかずかと彼女達がいる食卓（戦場）に足を運ぶ。
「俺にも食わせろ！」
「あ、ちょ」
そして目標のブツを見つけると白髪の少女の腕を掴み自分の口へと近づけた。
鼻腔に入る異臭に首筋に冷や汗が流れるも男ならこんくらい我慢してみせろと気合いを込めて口に入れる。まさにその姿は勇者の如く、何も恐れない勇敢な男である。彼の妹は久しぶりに目を輝かせて兄を見ていた。もう、引くことは出来ない。
せめて、料理の味でも伝えて状況のヤバさを少女達に伝えようとする。
「ふむ、ゴリゴリしててネチョネチョしててなんとも味わい深い……」
ドサッ
口から泡を吹き床に若が倒れる。彼は身を挺して少女達の命を守ったのだ、正に次期里長に相応しい姿である。
ここに、勇敢な一人の男の命が儚く消え去った。

「お兄様!?」
「心配ありません姫様、よくあることです、どうせ師匠との鍛錬に疲れて眠ってしまっただけでしょう」
「ええ……？」
「それでは、気を取り直して、いただきます（ぱくり）」

「…………ごくり」

「味はどうですか？」

「……食感は少し違和感はありますが味は美味しいのではないでしょうか、よく出来ているのでは？」

「そ、そうですか。それなら私も（ぱくり）」

「どうですか姫様、味の方は」

「はい、ドロドロしててネットリしていてなんとも新鮮な味わい……くっ」

バタッ

「姫様!?」

若が必死に守ろうとした一輪の華も、凶弾に倒れた。

研究

☆月●日

料理をつくったのだが、何故か若と姫――若の妹らしい――も倒れてしまった。流石に何かが変だと思ったので姫を抱えて母のところに行くと何人かのべっぴんさんとお茶会?してた。その中に紫髪の少女の母親もいて「ああ、大丈夫ですよ」と言っていたので大丈夫なのだろう。確かな根拠はないが。

目覚めるまで横で見守っていたのが夜も遅くなってしまったので家に連れ帰られてしまった。明日、若に無事か否か確認しよう。

☆月□日

どうやら無事なようだ。俺としても姫のような美少女が酷い目に遭うのは許せない。今度は姫の身辺調査をしないとな。ねえ知ってる?若の家と俺の家って案外近くて水浴びとかも二階から丸見えなんですよ?

☆月△日

今日は真面目に鍛錬した。鍛錬というか研究なのかもしれないが。正規な木刀の構えを取らず、敢えてダランと腕を下げて対人訓練を開始した。よくアニメで見る無防備での構えだ。もちろん師匠には何の効果もなくフルボッコにされた。

☆月○日

イメージするのは流水岩砕拳。流れるように師匠の攻撃を受け流し高速の打撃を叩き込む、なんてことは出来ず顎に強烈な一撃を貰って意識が飛んだ。もう泣きたい。

・　・　・

☆月▽日

今まで俺は
・相手の攻撃を受け流す
・流れるように攻撃を繰り出す
という二つの目標を立てていた。だがこの目標こそがダメだったんだ。

攻撃と防御の二つで考えるのではなく攻撃＝防御で考える、そうすると木刀の平で上手く攻撃を受け流しその勢いを利用して斬撃を繰り出せた。当然相手は若だが、師匠ならこうも上手くはいかなかっただろう。

とりあえず攻撃と防御を連動させ動きの流れをつくることを念頭に修行に励むことにする。流水岩砕拳とは方向性が違うが良しとしよう。

☆月◎日

事件が起こった。
なんと師匠が俺の木刀（相棒）を叩き切ったのである。そう、師匠への怒りを込めて刀身に悪鬼滅殺を刻んだ木刀が。俺は当然怒った、転生以来最高にブチギレた。
左手にあったゴツゴツとした岩の刀を握って師匠に襲いかかり腹

に蹴りをくらった。あのクソジジィ、親から物は大事に扱いなさいって言われなかったのかよ！

☆月＋日

不貞寝して布団に引き籠っていると、そういや昨日なんで岩の刀なんて持ってたんだ？と気付いた。今まで木刀以外に持ったことはなかったのに、おかしいな、と。

何気なく枕に手を置き、グッと力を込めるとあら不思議。手の中にふわっふわな棒があるではありませんか。よく見たら刀に似てなくもないし、もしかしてコレは来たんじゃないか……!?

☆月＊日

早朝誰も起きていない時間に家を出て、すぐに秘密の大樹のところに行き研究を始めた。

昨日、一昨日のあれは夢ではなく実際に刀を創り出すことが出来た。どうやら手の平に触れた物を刀の形に変換できるようで、試しに石に触ったら石の刀が創り出せた。うん、これ無限の剣製みたいなものじゃないですか？きたこれ、俺の時代がＫＩ☆ＴＡ☆ＺＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！

☆月—日

母にこのことを自慢すると「それ土妖術じゃないの？」と言われた。確かに……言われてみればそうだな。無限の剣製だって投影(トレース)の極めたＶｅｒだし、そういう類いのものだと考えた方が合っているだろう。なんだよ、無限の剣製じゃないのか……。

でもでも、父は「そんなに土妖術を上手く扱えるなんてすごいな、それに関しては里一番じゃないか？」と言ってくれたので少し誇らしかった。

別に俺は里を守れることのできるぐらいの力があればいいだけだし、エミヤのように守護者になるつもりはない。そこまで思い詰める必要はないだろう。

☆月□日

っし、明日は久しぶりに鍛錬所に顔を出すか。師匠が怖いけどなんとかなるだろ。

赤と白

　オーガの里における鍛錬所と聞かれたら、まず真っ先に挙げられるのが山の麓にある洞窟だ。
　横に大きく開いた空間は里の者達全員を収容できるかもしれない程に広く、何世代も前から受け継がれてきたといえる証拠である傷跡も見られる。中でもかつて存在していたという〝鬼人〟がつけた巨大な穴は壮観であった。
　鬼人が穿ったというその穴を洞窟に鍛錬に行く者は越えられるように自らを鍛えるのだ。例え越えられないことが分かっていても、愚直に自らに重荷を課す。それが彼ら戦闘民族の生き甲斐であり性分であるのだから。
　そして、それは屈強な大人達に限った話ではない。未だサナギから孵化していない子供達も生まれながらにして戦闘民族である。
　現に、里のはずれに存在する林に囲まれた場所では木刀がぶつかり合う音が響いていた。
「ふぅ……準備運動はこれぐらいにしとくか」
「そうしましょうか。丁度身体も温まってきたところですし」
　赤髪の少年――若が木刀を肩に担ぎ、感触を確かめるように数回力強く握る。メキメキと悲鳴が出るがこれは元気な証拠だ。
　気にしていないように木刀を更に強く握り、正眼の構えを取る。
　正眼の構えこそ基本にして奥義、という里に伝わる伝承が若は非常に気に入っている。現代でいうなれば子供が仮面なんとかのポージングを真似る、といったところだろうか。
　それに対して、白髪の少女は少し呆れたような顔をしながらも剣先を自身の身体の後ろに下げて戦闘の準備を終える。
　これは脇構えといって、刀身を見せないことによる奇抜な構えだ。相手に刀身の長さを視認させないことによって実際に斬り合うまでは秘匿性が高い。
　無論、弱点も存在する。こういった武器の長さに規定がある戦いではその秘匿性は皆無だ。少女も一応その構えを師匠から学んでいた

が、実際に戦いに持ち込むのは初めてだった。
少女の構えに舐められているとでも思ったのか若干頬を引き攣らせながらも口を開く。
「んじゃ、開始の仕方はいつものでいいよな」
その問に少女は黙すことで応える。少しは反応しろよお前、マジでぶっ殺すからな……！と歯軋りし、少女の狡猾な精神攻撃にまんまとハマっていることに気付いていない若は苛ついたように裾から刀の鍔を取り出しソレを無造作に空中に放り投げる。
それは廃棄される寸前だった物をなんとなく若が手に取ったもので、これといった華やかさこそないがこうやって子供達の道具として使われることは多い。もちろん若達も訓練の道具として重宝している。

放り投げられた鍔は空中で何回も回転し、上昇する。
その間に若は木刀を握り直し、少女の目を注意深く見る。あらゆる攻撃を想定しつつも、決して慎重に大胆にならないように。
そして、鍔がぴたりと空中で止まったかと思えばすぐに落下を開始し始めた。
ゴクリと唾を飲み込む音がやけに響く。物音一つ立たない静寂なこの場所において無駄な音は存在しない。僅かな呼吸音、着物が擦れる音、地を踏む足音。最後に鳴るのは
カタンッ
――――鍔が地面に触れた音だった。
(今だ！)
若は、足腰に力を込め一気に距離を詰めようと足を踏み出す。最初の出だしで全てが決まると言っていい。若はそのことを文字通り身に染みて理解している。肘、腰、額、ありとあらゆる箇所に打ち込まれてきた。ときには股間にだって遠慮なく木刀の刃が及んだことだってある。だから、だからこそスタートダッシュで躓いては駄目なのだ。
(どこから来る？下からか？それとも上か？と思わせて横からか？そ

れとも）
　少女の挙動一つ一つを必死に注視し、どの角度からも対処できるように姿勢を保つ。そして、二歩目を踏み出し少女との距離が更に縮まる。そろそろ彼女の刃が首元に忍んで来る頃合いだろう。より一層神経を尖らせる。
　彼女と交差していた視線が、舞ってきた木葉に遮られ――視界一杯に木刀の刃が迫っていた。
　眼前に勢いよく迫る刃に思わず足が止まり、そのままノックアウト……なんてことはなく冷静に木刀を振って叩き落す。
（っしゃあ!そうくると思ってたぜ！）
　少女の攻撃、木刀の投法を防ぐという今年に入って最高の快挙に心の中で顔が歪むが今は試合中だ。故にすぐに意識を切り替え少女の姿を視認する。
　地を這う蛇のように身体を低く屈め、足は瞬発力を意識しているのかバネのように折れ曲がっており、雪のように白い手を地面に着いていた。

――隙だらけだ！
　意図せず湧いた絶好の機会に若は自分が少女を打ち負かす未来を幻視し、迷わず腕に力を込め木刀を振り下ろす。が、

「隙だらけ、ですよ」
　視界から少女が消え、その瞬間腹部に強い衝撃が走った。痛みに顔を歪ませつつも視線を下にずらしてみれば青白い光を両手に纏った少女が普段通りの無表情で掌底の構えを取っているではないか。
　油断した、だがこの距離なら、と若は瞬時に判断し振り終えてあった木刀を横薙ぎに振る。
「はぁあ!」
「……ん!」
　だがそれさえも少女は横跳びによって逃れる。ズダァア!と地面を削りながら着地し、持ち前のスピードで若の懐まで一瞬で距離を詰

めてききた。若も予想していたように木刀を振り回す。
武器を持つ若と、無手である少女。傍から見れば一方的な展開になるのではと錯覚するが
「っくそったれ！」
攻撃を身に受けたのは若だけであった。
魔力量や瞬発力、技術力では少女の足元にも及ばないが単純な筋力だけでいうならば若の方が高いといえるだろう。だがしかし、どれだけ力を持っていても鍛えられた技の前には無力である。
例えるなら海に筋骨隆々の男が渾身の拳を叩きつけたとしよう。果たして海はその衝撃によって吹き飛ぶだろうか。
いいや否、少しさざ波立っただけで数分後には何事もなかったかのように波が押し寄せる。所詮、技を磨くことを忘れた拳なのだ。
……無論、単純な筋力だけで海を吹き飛ばす者もいるだろうがそれは気にしてはいけない。
そのことを理解しているからこそ若は必死に振り続ける。
少しでも早く、その技を盗むために。少しでも少女に追いつくために。少女に負けた日に誓ったのだ。絶対にコイツを完膚無くボコボコにして煽ってやると。そのためならば幾ら負けてもかまわない。最後に勝った奴が勝者なんだ、そして勝ち逃げしてやる、と。
「ぐあっ!?」
顎に少女の後ろ蹴りが突き刺さるも気合いと根性で何とか朦朧とする意識を取り戻す。無数の汗の粒が浮かぶその顔には苦悶の表情ではなくどこか誇らしい顔をしていた。
まさかこの男目覚めたのか？と思った少女であったがそれがすぐに勘違いだと気づく。彼の瞳は、彼の髪色のように赤く燃え上がっていた。
「へへ……まさかお前とこうやって打ち合えるようになるとはな」
上気する胸を落ち着かせながら静かに口を開く。確かに、訓練当初は酷かったものだ。最初は見向きもされず放置され、ようやく構ってくれたと思ったら今度はサンドバックとして扱われる始末。
だからこそ、終始押されているものの一応試合になっていることに

喜びを見出す。実験という名の股間の正しい蹴り方を学ぶための講座で犠牲になった息子達は必要な犠牲だったのだ。
だが、このとき若は思いもしなかった。まさか少女が全く本気を出していないことに。
「……打ち合える、ですか？ そうですか、若はこれが試合として成り立っていると思ってるんですね」
「あ？」
少女の突然の問いかけに、やっと会話する気になったかという顔するがそれは表に出さずに（と若は思っている）端的に答える。
「いいですよ、貴方が試合と思っているのなら。ずっとその思いでいてくださいね。ずっと、ずっと」
少女は数歩後ろに下がり両手を地面に着き、戦闘開始の際の姿勢に戻る。
その異様さに改めて若は目を見張る。
現代でいうなればクラウチングスタートのようなものだろうか。だが、それとは少し違って彼女の独特な姿勢になっていた。
右足はこれでもかと後ろに引き下げられ、左足は地面と平行にバネのように折れ曲がっている。まるで、極限まで引き締められた弓のような姿勢。

大きく息を吸い込む音が聞こえる。

その音がやけに耳に響いた。少女からの打ち合いで鍛えた直観がナニかが来ると判断し、無意識に腰に力を込める。首筋には冷や汗がどっと流れていた。
思わず、今から人を殺すかのように殺気が高まっている少女に声を掛けてしまう。
「ちょ、まっ」

「慢心を抱いたまま、逝ってください」
　少女の声が耳元で聞こえた瞬間、若の股間が破裂した。
「ふっ……、またつまらぬモノを蹴ってしまった……」
　少女は地に伏せる若を見てどこか気持ちよさげに呟く。もちろん元男である彼女は股間の痛みを身を持って理解している。しかしだ、やられるのは嫌だったとしてもやるのは楽しい。
　それに今世には息子はいない。一度も使用することなくお別れとなったことは大変悲しいことだが、無くても別に困らないなという境地に至ったため未練はないのだ。
「ん、また魔獣が里に来てますね」
　未だ股間を抑えて悶々としている若から目を離して、森の中に視線を向ける。里に来ている、といってもかなりの距離があるが通常なら森の上位種族であるオーガの里に近づく命知らずな魔獣はいないはずなのだ。それもここ一週間頻繁にやって来ている。方角は西から、恐らくそこはオークの支配領域だった気がするが……。
「まあ、別に問題はないでしょう。もしオークが襲ってきても師匠達が瞬殺するでしょうし」
　頭の中でオークの首を一瞬で刈り取る師匠の姿が容易く浮かぶ。
　彼女のオークへのイメージは女性に種付けするけしからん魔物、ぐらいで戦闘力はあまりないと考えている。それに、戦闘力が想像よりも高くても装備も技術も豊富なオーガの大人達が負けるとは思えない。
　要らぬ心配だったな、と少女は泡を吹いている若を無視して里の方に踵を返した。

依頼

×月×日

何故か分からんが流水岩砕拳が使えた。えへへ、俺ってば本番に強いのかな。無限の剣製もどきを披露することはなかったがまあいいだろう。若をボコせただけで俺は大満足だ。
ああ、もちろん師匠にはボコボコにされた。二代目木刀も少し亀裂が出来てしまっている。同じ木材なのに何で俺の木刀はボロボロで師匠のは傷一つないんだ……？

×月◎日

俺を見た瞬間若が股間を抑えて逃げていった。正に脱兎の如く、いやこの場合だと脱鬼の如くか？どちらでもいいが何故逃げ出したんだろう。
今度姫様に聞いてみようかな。若の妹だから何かしら知ってるでしょ。べ、別に美少女に会いたいなんていう低俗な考えじゃないし。必要事項だし。

×月▽日

父が身繕いを始めたので家出かと思ったがそんなことはなく、人間から依頼が入ったので準備をしているとのこと。
確かによく見れば必要最低限な食糧しか荷物の中には入ってなかったし本当に仕事をこなすだけなのだろう。
いつものヘラヘラした顔で「ははは、こう見えて風の弓兵と呼ばれた男だぜ？寿命以外で死ぬことは有り得ねぇよ」と言ったので問題はない、はずだ。
どうでもいい話だが今日の夕食はご馳走だった。確かに美味いのだが……たまにはコンビニの安いおにぎりを食べたいな。

×月▽日

空がキレイだ。ううむ、こういうとき松尾芭蕉とかだったら良い一句を思いつくんだろうが俺では何一つ思いつかなかった。強いて言うならば姫様の裸しか浮かんでこなかったよ……。

幼女の裸、最高ですわ。そもそも俺ってTS転生したみたいだし水浴びとか覗いても合法だったね。まあ、一線を越えぬためにも一緒に水浴びなんてしませんでしたけども。

やはり童貞の俺からすれば少しハードルが高かったようだ。せいぜい俺は姫様の裸を遠く離れた森の中から見ることが妥当だな。一緒に水浴びはいずれだ、頼むぜ将来の俺！

×月○日

股間に鎧の肩に付いてる防具をつけてきた若が真剣な顔で訓練場所に来て笑った。今生において一番笑ったのではないかと思う程笑った。皆の目もあったので腹を抱えて転げまわったりはしなかったが俺一人だったら笑い死んでいた。若って本当に俺を笑わせる天才だよな。里長じゃなくてお笑い芸人を目指したらどうだろうか。

×月☆日

今日は父からお話があるとのことで家の裏にある蔵に連れられた。そこには大層立派な黒色の洋弓があって目が飛び出ました（小並感）

父は何世代も前から伝わる我が一族の宝だとか言っていたが俺からすればエミヤきゅんの弓にしか見えんかった。持ち手の所にも白い金具みたいなのがついてたし。

父の話の内容は俺がいない間母ちゃんを頼むぞとのことだった。そこはまあいい、なんか死亡フラグ立った気がしなくもないが。問題は次だ。エミヤの弓もどきよりも驚いた言葉が父の口から発せられ

たのである。「母ちゃんのお腹の中にはお前の兄弟がいるからな！」って。

驚きを通り越して俺は悟った、必ずやこの性欲の暴君を懲らしめなければと。

腹いせに父の目を盗んで父の弓矢に悪戯してやった（もちろん安っぽい弓である、蔵にあった弓ではないぞ）。ただし後悔はしてない。消え去れ性欲大魔神め！俺は魔法少女だからお前とは相反する存在なのさ！

☆月■日

ちょっとサボり気味だった研究を再開することにする。

まずは物質錬成――――俺流無限の剣製のこと――――はどれぐらいの時間現世に存在できるかについて。結果は数分で消え去ってしまった。俺が込める魔力量も関係はしているようだがとある一定時間を超えると何が何でも存在できなくなってしまった。これはかなり問題である。数分ごとに錬成しなきゃならんのか。面倒臭いな。

里に襲撃してくる奴がどれだけ強いか分からないなかで不安要素があるのは無視できない。今後は刀の存在時間についても考えていこう。

☆月◆日

ああそうだ。どうやら俺の物質錬成はやはり刀と……剣しか作れないらしい。いずれ火縄銃とか作って無限弾丸！って考えていたがその夢は儚く散ってしまった。ちくしょう。

☆月―日

物質錬成（剣）はやはりすごい。炎を纏ったり光のビームとかは出ないが切れ味だけは本物だ。料理にて大活躍である。

☆月□日

やっべ、少しハイになってて剣作り過ぎた。久しぶりの魔力枯渇を感じて身体が怠い。まさかこれって生理という奴ではと思ったが違うだろう。怖いよ、生理痛と師匠が……。

同時に錬成出来るのは二振りだけでそれが限界だった。強度に関しては触れた物質の質や込めた魔力量によって異なるっぽい。刀を造っているところにお邪魔して失敗した鋼を借りさせてもらったので検証済みだ。あのおっちゃん気安く渡してくれて正直拍子抜けした。人は見かけによらないんだね！

☆●日

今日、父と数人の男達が里を出発した。行先はファルムス王国とのこと。そんな国名リゼロにあったっけと疑問に思ったが記憶もあやふやなので気にしないことにする。

父含め彼らにはぜひ五体満足で帰ってきてほしい。余談だが、お土産も頼んでおいた。この世界にタピオカってあるかしら……？

☆月十日

さあーて、俺も研究と鍛錬を頑張りますかね。とりあえず明日から、だな！

・　・　・

＊月◎日

血の匂いがする。

父さん

その日はいつもと変わらない一日だった、はずだった。

長い白髪を後ろで束ねた女性が慣れた手つきでご飯をよそい、その女性の娘と思える少女がパタパタと料理は食卓に載せる。色とりどりの食材がふんだんに使用された料理が食卓の上に並んでいるのを見るに食事の準備をしているのであろう。

今家には二人しかいないのに間違えて三人目の分もよそってしまったと笑い合っている。彼女らの家庭はオーガの里の中でも有名だ。一騎当千の力を誇る女傑に、ここにはいないが里一番の弓の腕前を持ち風の弓兵とも称された男、そして里の中でも類稀な天賦の才を持つと期待されている天才児。

三人は一人一人の個性が強いものの他人に好かれる人柄をしており皆から人気も高い。尚且つ、その女傑の腹に第二子が宿ったという話題も相まって良くも悪くも有名だ。

女性と少女はひとしきり笑い合った後に(少女は少し微笑んだだけだったが)、余分によそってしまった分を鍋に戻し席に着く。何世代も前から受け継がれている家屋であることも影響もしているのか、茶の間はまるで公家の一室のように広く質素だった。

二人は手を合わせて「いただきます」と声を揃えて呟く。それは元々里に伝わる食前の作法であり、山の恵を頂戴するため感謝を込めて食そうという意なのだ。

「……なんか、血の匂いがしませんか?」

箸えと伸ばしていた手を止め、確かめるように少女が数回すんすんと鼻を鳴らし疑問を口にする。

しかし女傑は目線だけこっちに向けて「肉切ったときの残ってんじゃやねぇの?」とだけ返し黙々と箸を進めるだけだった。

彼女の言う通りオーガの里では肉を主菜に使った料理が多い。理由は単純に肉が好物である者が多いため。当然、肉料理は毎日出されるし一人当たりが消費する量も多い。なので血の処理も時間がか

かってしまいどうしても適当になってしまう。匂いが残っているのもそのせいだろう。
少女はそう納得し止まっていた箸を動かそうとして

コンコン

突然叩かれた戸の音に驚いて手の平から箸を落としてしまった。それを急いで拾う少女を流し目で見ながら、女傑は「誰だっつーの」と席を立ち戸を開ける。
「お、機織りのジジィじゃねぇか。もう帰ってきたのか?」
戸を開けた先にいたのは、泥で身体中汚れた老人だった。
甲冑越しでも分かる屈強な身体と幾数の傷跡は歴戦の兵士だという証拠である。普段は機織りの爺さんと子供達から呼ばれるほど温厚な性格であるが、刀を持つと豹変しバーサーク状態になることで戦場でも里内でも有名である。
彼は人間からの依頼で夫ら(アイツ)と一緒にファルムス王国に行ったはずだが……と女傑は頭上に疑問符を浮かべる。「まさか老いて身体が動かなくなってしまって途中で離脱してきたんじゃねぇだろうな」と煽るも男は突っ立ったままで一向に一言も喋ろうとしない。その代わりと言わんばかりに無言で木の枝を掴んだ手を突き出す。
「あ……?んだこれ」
男が掴んでいた木の枝を手に取り、訝しげに観察する。どこにでもある木の枝だが良く見れば強度を高めるために塗料が塗り込まれているのが分かる。中央部分には誰かが強く握ったような跡が残っており、木の枝の形も少しカーブが利いているように思える。だが、特徴といえばそれだけだ。ジジィが何の意味もなく木の枝を渡すとは考えられず、再度じっくりと観察し
「んー、どっからどう見てもただの木の枝にしか見えないん――――は?」
……言葉を失う。開いた口が塞がらないとはこのことだろう。鈍器で直接脳を叩かれたような衝撃が女傑に走ったのだから無理もな

い。
　これはただの木の枝ではない。しなやかさと確かな頑丈性を持っており、中心には大の男が握ったような手跡がある。よく見れば若干血のようなものも付着しているのが目に取れる。枝の両端には極細の限りなく透明に近い白色の糸が巻きついていて、途中で千切れてしまっていた。
　それは、どうしても女傑には弓だったものにしか見えなかった。
「母さん。どうしたのですか?ご飯が冷めてしまいますよ」
　一向に戻らない母を心配してのことか少女は床に座ったまま女傑の背中に声をかける。
「――――ッ!……なんでも、ない。お前は、先に食べてていい」
　動揺を隠し、顔に笑顔を貼りつけ答える。
　まだ疑問に思っているだろうが察しが良い少女は敢えて母の指示に従い鍋に箸を伸ばし始めた。それを横目に見てほっと息を吐く。愚直な自分の娘とは思えない心配りだ。やはりアイツの血が強いのだろうか。だが容姿は母寄りだと自分を鼓舞した思い出がいくつもある。それらは今になっては良い思い出だ。そして、女傑のお腹にいる新しい家族もきっとアイツのように優しくて
「あ……ああ………!」
　心臓の音はうるさいくらいに鳴り続けているが、今はそんな場合ではない。
　この――――弓には、見覚えがあった。幼い頃から共に森を駆け抜け、戦場では互いの背中を預け合った戦友にして……初恋の男。その男も、確かこのような弓を使っていた。
　自然と呼吸が早くなる。何を思ってこの老人は弓を私に渡したのだろうか、そう聞きたくて口を動かすも出るのは自分が意図して出たものではなかった。
「あ……う……ああああああああああああああああああ!」
　自分の、心の悲鳴。心の断末魔。それらが涙と共に止めどなく溢れ

出てくる。
「あっあああ!うあああああああああああああああああああ!!」
「母さん!?大丈夫ですか!」
急に蹲って叫び出した母に少女は持っていた箸を放り捨て瞬歩法で女傑の隣に移動する。だが女傑は娘の心配する声など耳に入っていないのか悲しみが籠った意味のない言葉を叫ぶだけだ。
「母さん!落ち着いてください!どうしたんですか!」
必死に何度も肩を揺するも全く反応しない母に痺れを切らし、戸の前で突っ立っている老人に目を向ける。
「どういうことですか!?説明してください!」
老人は少女の問いに反応しない。このクソジジィ……!と手が出そうになるが必死に堪える。この老人は動きが遅いことでも有名なのだ。
数秒待ってみればゆっくりと老人は泥だらけの手を合わせ口を開いた。
「死んだのだ。お前の父が」
「え……?」
老人の言葉に少女は目を見開く。何を言っているんだという感情が湧き出るが、老人は少女の心の内など知らないように口早に懺悔するように呟く。
「全ては人間の罠だったのだ」
「急に……どうしたんですか?」
「魔物にやる金はないと言われた途端白い鎧を纏った者達が襲い掛かってきた」
「だから、何の話を……」

目元を隠すように兜を前に下げ老人は掠れた声を出す。

「その者達が所属するのは、西方聖教会」

「そんなこと言われても――――は？ 教会？」

老人の言葉の内に、妙に耳に残るものがあった。今日日生きてきて一度も耳にしたことがなかった言葉だったが、前世では何度も耳にしているし実際に教会に行ったことさえあった。だが、それは前世での話だ。今世においては無に等しい。

一つ、一つだけ心当たりがあるとすれば

「魔女……教……」

リゼロ世界において重要な役割を持つ魔女教。それぞれの大罪を司る魔女がいて、それらを讃える……なんてものだったはずだ。魔女についいては辛うじて暴食と強欲があったのは覚えているがそれ以外には思い出せない。オーガの里を襲ったのだからきっと襲撃なんてものを頻繁にやっていると思っていて、何を目的に活動しているかは知らないし本当に初歩的な知識しかないのだ。

せめて少しでも情報を得ようと老人の言葉に耳を傾ける。

「魔物の殲滅を教義に掲げる者達の溜まり場だった」

「…………」

魔物の、殲滅。

「我らは為すすべもなく壊滅された。生き残ったのは儂のみ」

生き、残った。

「せめて散っていった同士達の遺品をと戻った先にはこの薄汚れた弓しか残っておらんかった」

散っていった、同士達。

「その場にあった穿たれた大地は恐らくお前の父によるものだろう」

お前の、私の父。

「アイツは、生涯の最後にて〝鬼人〟と並んだのだ」

生涯の、最後。

「お前の父親は、偉大な誇り高き風の弓兵として死んだのだ」

風の弓兵として、死んだ。

「は……は、そんなバカなこと私が信じるとでも」

老人の話を全く信じていないように、或いは揺らいでいる自分に言い聞かせるように声を絞り出す。ああ、魔女教について聞こうとしていたのに真っ赤な法螺話だったとは。なんて嘘つきな老人なんだろう。オーガの里の老害という称号を与えてやろうか、と頭の中で意味のないことを必死に思考し続ける。まるで現実から目を背けるように。

「あ……」

ふと、叫びさえ出なくなった母――――女傑の方を向く。未だにボ

ロボロと涙が流れ落ちているが、どうやら先程のような錯乱状態は収まったようだ。そう安堵した瞬間、視界の端にある物が入る。

「ああぁ……」

女傑の腕の中に抱かれた、どこにでもあるような木の枝から目が離れない。どこかで見たことがある、そんな気分に陥った途端全身から血の気が引く。

どこかで見たことがある、なんてものじゃない。

自分の父親の愛用していた弓にしか見えない。何故ここにある？当然だ、老人が言っていたじゃないか。私の、俺の父は――――

「ああああああああああああああああああああああああああ！」

少女が突然叫び出し、狂ったように家の中へ走り戻る。

「おい、落ち着け！」

「あああああああああああああああああああああああああ!!」

うるさい、誰だこの声は。

階段を転げ落ちそうになりながらも這い這いで登る。

「あぁっああああああああああああああああああああああ!!!」

耳元で叫ぶな、頭痛がする。

荒い呼吸を気にもせず戸を勢いよく開けて部屋に飛び込む。その拍子に部屋の中にあった木刀や机が吹き飛ぶ。

「ああああああ、あはははっはははははははははははははは!!!!」

ああ、机を倒してしまった。後で謝らないと。

畳に敷いてあった布団に蹲り、何かに縋るように布団を抱き締める。

「あはははははははははははははははははははははははははははは!!!!」

高らかに狂気に満ちた声を上げる。

きっと父は死んだんだ。だから母もあんなに取り乱したんだ。それ以外に考えられない。考えることが出来ない。頭の中がそれで一杯一杯で破裂しそうだ。……ああ、それも案外いいかもしれないな。人殺しにはお似合いの死に方だ。父も死んでその娘も死ぬ。実に滑稽だ。

そう、父は殺した、殺したんだ私が。

あの日、父に母の腹の中にはお前の新しい家族がいると言われ、くだらない感情で悪戯を父の弓に施した。父はとっても強い人だから、きっとこの悪戯がなかったら今もこの世界にいただろう。

でも、もういない。私が殺したんだから。

直接殺したわけじゃない?そんな都合のいい話があるか。父は、私がどこに隠れてもすぐに見つけ出すし、遠く離れたそれこそ数キロはある先を視認することだって出来る。弓の腕だって百発百中の凄腕だ。私の悪戯以外に負ける要素がない。

私が、殺した。

≪確認しました。ユニークスキル『破綻者（クルウモノ）』獲得………成功しました。同時に「　」を発動しました≫

ああ、父さんの声がする……。

≪ユニークスキル『破綻者（クルウモノ）』の「能力狂化」により同等又は高位の能力（スキル）以外の下位の能力（スキル）を黒化……成功しました≫

ごめんなさい、全て私が悪かったんです。

≪エクストラスキル『遠視』『魔力感知』『物質錬成（剣）』『流水岩砕拳術』ｅｔｃ……を黒化。成功しました≫

いかないでお父さん。私を置いていかないで。

≪ユニークスキル『破綻者（クルウモノ）』が魂へと干渉……状態異常無効により遮断されました≫

私もそっちに連れてって。

「あはははははははははははははははははははははははははははははははははははは!!!!!」

≪精神状態への悪影響を確認……「夢の虜」を強化発動します≫

一人ぼっちは嫌だよ――――――――――――――………

夢

○月○日
死にたい。
目が覚めるとそこは地獄だった。父さんにもう一度会いたい。
闇の中に沈んで、そのまま溺れて死んでしまいたい。
嫌なことだらけだ、この世界も。
あの世界も。

○月×日
死にたい。
父さんと夢の中で会った。
笑っていた。何故か笑っていた。
罵ってくれなかった。
私にとってそれは悲しかった。俺にとってそれは嬉しかった。
眠くない。

○月◇日
死にたい。

父さんと夢の中で会った。
頭を撫でてくれた。アイツとは違う優しい手で、俺を包み込んでくれる。
豆だらけで一見怖いけど、本当は温かいのだと私は知っている。

ああ、今日もよく眠れなさそうだ。

○月△日
死にたい。
父さんと夢の中で会った。
弓の使い方について勝手に教えてきた。問答無用といった感じで。
そういえば、ここ最近の天気は雨ばっかりだ。
でも、以前とは違ってそれは私の心を洗い流してくれているような気がして心地よかった。
本当に、死にたくなる。

☆月●日
死にたい。
父さんと夢の中で会った。
練習として弓を使ってみた。どこにでもあるような木の枝で、矢を構えた。
父は筋が良いと褒めてくれた。アイツとは違う、そのことを感じると俺は無性に腹が立つ。
何故、自分が生きているのか疑問に思う。

☆月□日
死にたい。
父さんと夢の中で会った。
母の話をしてくれた。それは俺の知っているような母じゃなかったが、聞いていて楽しかった。
父さんが父さんだったら、こんな家族になっていたのかもな。
姉さんも、父さんがいたら父さんなんて殺さずに済んだはずだし。
良い、家族だった。

☆月△日
死にたい。
ああ、今日は川で魚を釣ったんだ。
私は釣れなかったが、父さんのを分けてもらって食べさせてもらえた。
美味しかった。味はしなかった。
死んだ魚が、まるで自分のように思えて嬉しかった。

☆月〇日
死にたい。
生まれて初めて空を飛んだ。
父さんにおぶってもらって、地上からは見えない景色があるのだと知った。
天国から、見下ろしているみたいで楽しかった。
母さんは今どうしてるだろうか。今も姉さんと二人で生きてるだろうか。
もし死んでしまっていたのなら、天国に行っているはずだろう。
私には地獄がお似合いだけど。

☆月×日
死にたい。
父さんは、父さんは私に凄く優しい。
そうだ、姉さんも俺には優しかったな。冷たい印象のある人だけど、意外と優しい。
俺達とは大違いだ。

☆月＋日
死にたい。
もう嫌だ。
呼吸することさえも億劫だ。
思い出したのだ。思い出してしまったのだ。
俺の名前は坂口日和（サカグチヒヨリ）。
ちっぽけな人間だった。
頭痛が酷い。
誰でもいいから、もう一度、私を殺してください。

☆月＊日
死にたい。
やめて、叫ばないで。
叩かないで。
もっと、痛くして。

☆月Ω日
どうして、死なせてくれない。

二人の少年

「……なぁ、アイツ今日も来ないのか」
上気する胸を押さえ込みながら地面に伏している若が弱々しく呟く。傍には痛々しい幾数の傷を負った木刀が転がっていた。それに対して同じく地面に伏していた青髪の少年は「……さあな」とだけ返しただけだった。こちらもボロボロの木刀が傍に転がっている。
その場に静寂が流れる。
「……なぁ」
「さあな」
若の台詞に被せるように少年が遮る。若はどこかソワソワした雰囲気で又も口を開く。
「……n――――」
「さあな」
――――まだ何も言っていないんだが!?」
若が寝転がったまま叫び、耳元で叫ばれて耳が痛いのか少年は両耳を手の平で押さえた。
だが、それにも気づかぬように若は口早に少年を捲し立てる。
「いいか？ アイツが最後に鍛錬に来たのは二週間前だ」
「おう」
「それまでの来ていない日数最高記録がたったの四日なのにこれはおかし過ぎると言わざるを得ない！」
「そうだな」
珍しくも賛同する少年に若はガバリと起き上がる。
「そうだろ!? だから、ここは修行仲間である俺達二人で様子を見に行くのが筋なんじゃないだろうか」
「却下だ」
「どうしてだ!?」
驚く若を横目に少年は寝転びながら指を見せつけるように三本立てる。
「いいか、俺が行かない理由は三つある」

一つ、と言いながら少年は薬指を折る。
「俺が行く必要を感じない」
表情を一切変えずに言い放った少年に若は不満気な顔をする。
「だーかーら！心配だからに決まってんだろ！」
「……確かに、俺もアイツのことは心配でもある。だがな、これは感情で動いていい話ではないんだ」
「はあ!?」
激昂しつつある若をどうどうと鎮めながら言葉を繋げる。
「アイツが鍛錬に来なくなったどころか、家から一歩も出ることがなくなった理由は分かるだろ？」
その言葉には若も反論出来ない。ただただ少年の言葉に黙り込むだけだ。渋々といった表情でもう一度地面に寝転ぶ。
「………親父さんが死んだんだろ」
「ああ、機織りの爺さんが帰ってきてから、つまり父親の死を聞いてからアイツは姿を見せなくなった。これに関係がないとは思えない」
淡々と丁寧に若に説明していく少年だったが、実の所彼の父親も少女の父親同様死亡している。正確には行方不明だが。
それを聞いたとき少年はというと周りの目も気にせず大泣き………なんてことはなく、ただ「親父、死んだのか」と思っただけだった。
戦闘種族というのもあるだろうが、彼の一族は影に生きる者達であり『死』についてはよく理解していたのだ。その芯は家族の死をもってしてもゆるぎはしなかった。
「無理に他人である俺達が押しかける必要はないだろ、というわけだ」
「……ちっ」
「んで、二つ目の理由だが、単純にお前が面倒臭いから」
「は、はあ!?」
少年の言葉に舌打ちしていた若だったが、すぐにブチッという血管が破裂した音と共に飛び跳ねる。
「どこが面倒臭いんだ!?どこからどう見ても紳士的だろーが！」
「どこからどう見ても面倒臭いんだよ。ていうか、このやりとり自体

が優に百は超えていることに気づいてないのか」
「ぐぬぬ……」
顔を怒ったように赤くした若を見て少年は年季の入った重い溜息を吐く。「本当にコイツが次期里長でいいのだろうか……」と思いながら。
「大体、お前一人で行けば済む話だろう」
「そ、それは」
少年の言葉に若は言い淀む。
苦虫を潰したような、痛いところを突かれたような様子の若だったが、少年が寝転ぶ反対の方を向いてごにょごにょと言い訳を始める。口を鴉のように尖らせて、
「アイツと対面するとなんつーか、緊張するっつーか。調子が狂うっつーか」
「もっとハッキリ喋ろ。聞き取れない」
「……アイツと二人っきりだと、緊張すんだよ」
「こっちを向いて喋れ」
「あ、アイツと二人っきりになると緊張すんだよ！」
首を思い切り回転させ、少年の方を向く。そこにあったのは普段通りの無表情の少年――ではなくニヤニヤした表情の少年がいた。
「ほう、そうか。それは大変だな」
「絶対お前聞こえてただろ⁉」
ククク、と笑いながら返す少年に若は頬を若干引き攣らせながら叫ぶ。どうやら手の平の上で遊ばれていたらしい。ていうか遊ばれるのは日常茶飯事なので珍しくもないが。
少年が笑いを抑えながら口を開く。
「若、お前はきっとアイツのことが好きなんだろうな」
「は、はあ⁉ んなわけないだろ、俺は別にアイツの事なんて――――――」
「毎晩窓からアイツの寝顔を覗き見していたくせに？」
「――――好きではなくもなくもなくもないかもな」

結局のところどっちなんだよ。と心の中で突っ込む少年だったが
「若には早すぎるか……」と納得した。が、そんな少年の考いとは裏腹に若は耳まで真っ赤にさせながら話しはじめる。
「……ああもう、誰にも言うんじゃねぇぞ」
若の雰囲気が変わったことに少年は気づく。顔は背けられてるので見えないが林檎のように真っ赤なんだろう。別にそこを追求する気はないが、ここは空気を呼んで口を挟まないようにしておく。
「実は俺は、アイツのことが好きみたいだ」
「そうか」
「……いやもうちょっとリアクションあるだろ。え、本当かよとかそういうのが欲しかったんだが」
面食らったように、若が眉をぴくぴくさせながら悪態を吐く。
これでもかなり勇気を出した方なのだ。驚かれたりした方が無視よりは断然楽だろうし。
ふぅ、と小さく息をして少年は一文字に結ばれた口を開く。
「リアクションもなにも、元々お前の意中の相手がアイツだってことには随分前から気付いていたんだが」
「……マジか」
「マジだ」

なんてことだ、と若は顔を手で覆う。同年代である少年にバレてしまっているのであれば当然観察眼がイカれてる師匠や親父にも…………。若の未来は前途多難のようだ。

その隣でまさかコイツ隠せてるつもりだったんだろうか、と少年はそんな若を眺めていた。

鍛錬の際も例の少女がいるときはカッコよく見せようとして凡ミスを連発したり、人参を家に届けられて嫌なはずなのに少し嬉しそうだったり。お前はどこの青春漫画の主人公だ、そんなツッコミが次元を超えて若の胸に突き刺さっていた。

若はぐしゃぐしゃと髪を乱暴に掻き乱し、

「だあああああああああああああああ!もう、クヨクヨしてても何にも変わりゃしねぇ!俺は行くぜ、行ってやるよチクショォオ!」

突然起き上がって里の方に走り出した。若の叫びは何処となくヤケクソ気味だった。

「おう、逝ってこい」

それを少年は後ろから見送るだけ。

昔からこの二人の関係はこんな感じだったのだ。若が問題を起こして、少年は巻き込まれる。いわゆるトラブルメーカーと仕事人が絶妙にマッチしてしまったのだ。まさにこれこそが神の悪戯ならぬ鬼の悪戯。里の者達は二人の関係をそう表していた。

既に豆粒のように小さくなっていく若の背中を見つめながら、少年はほんの少しだけ口角を上げる。

「そうそう、言い忘れたが、三つ目の理由は――――」

赤髪の単純な少年に、聞こえるわけがないのに、青髪の大人びた少年は独り言のように呟く。

「――――こういうのはお前の方が適任だろ、バカ若」

少年の言葉は、舞い上がる風と共に何処かに吹かれていってしまった。

少年と少女

　若が少女のいる母屋に入ると、すぐに女傑が出迎えてくれた。久しぶりに見る彼女の顔は以前と比べやつれて見えたが、瞳の色は失っておらず、笑顔を顔を出していた。
「ちょっと、アイツに用があって」と声を掛けて入室の許可を求めると、ただニッコリと笑っただけで明確には応えてくれなかったが、何も言わずに家の奥の方に行ったので若も追従することにする。
　彼女の腹は普段とは異なり、少し大きく感じられた。そういえば師匠が子供を孕んだっつってたな、と思い出し納得した。
　少女がいる二階まで階段を上っている途中に、女傑から色々な話を聞いた。この数週間、まるで食事を摂らず顔も見せてくれない。師匠や親父、青髪のアイツも心配して訪ねてくれたが扉の前に門前払いされてしまった、などなど。
　なんだよ、アイツあれだけ人のコト煽っといて自分も行ってるじゃねぇか！と若干腹を立てた若だったが階段を上り終わり、自然と心の中は湖のように静かになった。
「そんじゃ……、私はここいらで」
「はい。ありがとうございます」
　ゆったりとした足取りで階段を下りていく女傑に感謝を口にし、扉へと向き直る。
　正確には、〝扉〟はそこに存在しなかった。
　無造作に開けられた戸があり、部屋に入らずとも中を窺うことが出来る。ただし、光が部屋の中にないのか扉の向こう側は真っ暗だった。
　聞こえるのは、自分の呼吸音のみ。
「おいテメェ。そこにいるのか」
　若は少女を呼ぶ。
　返事はない。だが、少しだけ中から物音がした気がした。この部屋の中に少女がいるのは間違いないはずだ。それならばと、先ほどより

も大きな声で少女を呼ぶ。
「いるんだったら、返事しやがれバカ」
若の声が闇の空間の中でやけに響く。
返事は返ってこなかったが、若はそんなこと全く期待していなかった。
呼びかけたのも単なる気まぐれであり、正直なところどうやってこの中にいる白髪の少女を連れ出そうか見当もつかなかったのだ。なら、当然その後は自分自身が彼女に近寄るしかいない。
若はやけに重く感じる足を持ち上げ、一歩ずつ、静かに部屋の中に入る。
外からでは暗闇のせいで分からなかったが、目が慣れてくると部屋の惨上がよく見えてくる。
砕かれた花瓶の破片、折り投げられた机。
なにより若の目を一段と惹いたのは――――――――壁一面に広がる見たこともない文字の羅列だった。それぞれ何行ずつかが纏まって書かれており、部屋の至る所に刻まれている。
筆を使用した形跡はないため恐らく爪を使って刻んだのだろう。そして、その文字を書いた張本人であろう白髪の少女は
「そんなとこにいたのかよ」
散らばった家具が広がる部屋の隅に、身体を抱えるようにして蹲っていた。若に背を向けるようにしているので顔は見えないが、その背中からはかつてのような覇気は感じ取れなかった。
床の遮蔽物に気をつけつつ、ゆっくりと少女へと近づく。
「なあ、どうしちまったんだ。ここ何週間も鍛錬に来てない。アイツらもお前のこと心配してたぞ?」
よっこらしょ、と倒れた棚をどかし少女の後ろに立つ。至近距離でなくては分からなかったが、彼女の髪にはいつものような輝きがなく、枯れた百合の花のように感じられた。
その頭をポンと叩いて、わしゃわしゃと掻き乱す。
「けっ、シカトかよ。つまんねぇな、この前までのお前だったら『私は心配されるほど弱くありません』とか言って反論してたくせによ」

少女は、ただ、少し顔を背けただけで、それ以降動く気配はなかった。

肌の色も元々白かったが、今では病人の肌のように真っ白になってしまっている。僅かに見えた瞳には何も映っていなかった。

若はそんな些細なこと気にならないように無造作にどすんと床に座る。

それから頬を指で掻きながら

「なあ、俺達が最初に出会ったこと覚えてるか?……実はよ、出会い始め当初はお前のことがスゲェ気にくわなかったんだ。お前の目は俺達じゃなくて、もっと違う別の何かを眺めてた」

ふっ、と若は自虐するように笑う。

「そんとき、幼かった俺はお前のコトを変なヤツだと思ったが、それ以上に強く思ったことがあったんだ。ああ、お前の目を俺に向けさせたいってな」

少女は動かないし、答えない。それでも若は喋り続ける。

「子供特有のバカみてぇな発想だった。けどよ、今となっては……バカみたいには思えなくなっちまってる」

そう言って若は大きく両腕を広げる。まるで生涯最高傑作を作り上げた芸術家のように。

「なあ、知ってるか?俺達が住むオーガの里は、この世界の何千分の一、もしかしたら何万分の一ぐらいの広さしかねぇんだ。北には絶対零度の氷河大陸があって、南にはクソデケェ湖がある。東には帝国っつー超強ェ奴らがいて、西にはクソ高い塔が山ほどあるらしい」

少女の耳が、ぴくっと動く。

「俺は、まだこの世界を見てない。まだほんのしか見れてねぇんだ。いつかはさ、俺はこの世界を旅しようかなって思ってたんだ。実際に自分の足でその地に訪れて、見て、触って。そしたら、なんつーか、満たされると思うんだよ。この心が」

ニカっと歯を見せて、若は言う。

「俺は思うんだ。この世界を自力で生き抜いて、見て回りたいって。

でもさ、俺こうも思うんだよ」
そこで言葉を途切れさせ、穏やかな目で少女を見る。
「一人じゃ、無理だ……って。絶対どこかしらで躓いて、挫けそうになる。もう諦めよう、辞めようって。だからさ、そんなときに「もう少し頑張ろう?」って言いてくれる仲間がいたら、少しはマシになれる気がするんだよ」
それから若は「あー……」と手を交差させたり、何かを表そうとしたが思うように出来なくて頭をくしゃくしゃと掻く。
「……つまりだ、俺が何を言いたいかっつーと、少しは友達に頼ってくれてもいいんじゃねぇかってことだ」
何言ってんだ俺、みたいな顔をして若は苦笑いする。自分でさえも意味の分からない話をコイツが理解してくれるわけがない、と。あーやっぱこの話ナシで――――と言おうとした瞬間、

「貴方は、誰ですか?」

若の鼓膜に小さな音が響く。それは彼が記憶するものよりも掠れた声で、弱々しいものであったが、それは確かに彼女の声だった。
見ると、目の前には深海のように深い青色の目がこちらを覗き込んでいた。
「あー……確かに、俺は誰なんだろうな」
少女の唐突な問いに一瞬呆けてしまうが、すぐに言葉を絞り出す。質問の答えにはなっていなかったが、少女は続きを促すように若の顔を見つめている。
それじゃ、と言わんばかりに若はニヤリと笑う。
「強いて言うならば、俺は俺だ。周りの奴らは揃って俺のコトを若って呼ぶけど、俺が俺であることに変わりはないしな」
「……じゃあ、俺さんですか」

いやそれは違うだろ、と少女の頭にチョップを叩きこむ。なかなかに強烈な一撃だった。

痛い、そう言って叩かれたところを擦る少女を横目に若は

「若とでも呼べこのバカ、俺さんとか一生言うんじゃねぇぞ。虫唾が走る」

少しだけ嫌そうな顔をするだけだった。けっ、とした様子の若と頭をなおも擦っている少女の間で会話が止まる。

……話は変わるが、とある少年の現在の心の内を表すとこんな感じだ←←

（やっぱ可愛すぎるだろコイツマジ俺を殺しにかかってるってでもこれで死ねるなら本望ですありがとうございましたぁ！来世はオーガ族随一のイケメンになれますようにぃぃ！）

「それなら、若さん」

「………んあ？」

いつの間にか垂れていた涎をふき取って少女の方を改めて向く。前髪が伸びてしまって顔の全貌は見えないが、口元を見る限りまだ生気はあるように見える。そんな些細な部分にも安堵しつつ、少女の言葉を待つ体勢になる。

「私を、殺してくれませんか？」